

注意事項

- 1 解答用紙、草稿用紙ともに受験番号と氏名の記入を忘れないこと。
- 2 問題用紙、草稿用紙は解答用紙とともに机の上に置いて退出すること。持ち帰ってはいけない。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

病の原因をたたく根絶するという発想は、感染症克服という課題が優先されていた時代に形作られ、現代医療のエトスの基底を形作っている(中川米造「医療の原点」)。病院に代表される医療機関の現場の実感も「戦いの連続」だろう。多くのビジネスにおいてもそれは同様かもしれない。だが、患者を救うために一刻を争い全身全霊を傾けて尽力している医師にとって、「病との戦い」という比喩的表現は実感に即したものであろう。サムライに比せられるヒーローとしての医師像はそれなりのリアリティーに裏付けられている。

「病との戦い」や現状克服への情熱は臨床現場に限ったことではない。先端医療の科学技術は「人間を抱えてきた限界」を超えていく能力をもつようになり、その能力を行使しようとする欲求は際限なく広がっていくように見える。そして、それは先端医療をめぐる激しい開発競争と不可分のものだ。国益が関わっているから、産業界だけでなく政府やマスコミも強く後押ししている。生命科学と先端医療は IT にかわる、新時代の世界経済、国民経済の一大原動力とも考えられている。

本書中略では、幹細胞や遺伝子診断、遺伝子治療などを用いた夢の未来の医療が紹介されている。老化の原因をつきとめ、長寿を実現しようとする研究も熱心に進められている。本書で触れられていないもので、すでに実行されているのは、好ましい卵子や精子を用いて好ましい遺伝子組成をもつ子供を産んだり、体外受精による受精卵の割球を遺伝子検査して生まれてくる子供を選別するデザイナー・ベイビーのような技術もある。さらに、女性が自分の子供を母、姉妹、あるいは見知らぬ他者に産んでもらう代理出産などもアメリカやインドなどで盛んに行われている。

これらは従来、医療の当然の目的と考えられていたものを超えるような事柄を実現しようとするものだ。従来の医療は通常の生活を過ごすのに困難を感じる人が、欠落した機能を回復するように努めるもので、「治療」がその目的だった。だが、昨今の最新医療技術には、「治療を超えて」、人間の欲望を満たす医療、人間改造をもたらす医療が増えている(レオン・カス編著「治療を超えて」)。こうした医療行為を「エンハンスメント(増強、増進的介入)」というが、このような科学技術の使用を「医療」とよんでよいのだろうか。また、医師がこうした行為に関与することを容認してよいのだろうか。

人間の欲望を満たす「医療」が拡充し続けられ、人間社会のあり方そのものを変えてしまうような事態が生じることも予想できないわけではない。老化防止の医療技術が開発され、お金さえあれば一〇歳を超える長寿を容易に実現できるようになったとしても、長寿を達成した個人はそれで幸せかもしれない。しかし、多くの人が一〇歳を超える長寿を達成した社会は果たして幸せな社会だろうか。またその社会は活力を維持し続けることができるだろうか。親がこれから生まれる子供の体力や知力を向上させるための医療措置をとるようになった社会に生きる人々は幸せだろうか。そういう環境で生まれた子供たちは今の子供たちより幸せだろうか(シム・デル「完全な人間を目指さなくてよい理由」)。

生命倫理、医療問題の諸問題を考えるとき、個人の快不快の度合い(幸福度)の総計を基準にしようとする功利主義の影響が強まっている。これは資本主義市場経済の論理には合致している考え方がもたれない。だが、今や個人の幸せを目指すだけの医療が、将来の社会や人類に何ををもたらすかについて真剣に考えなければならぬ時代になっている。生命科学や先端医療の開発に携わる科学者・医学者は、最新科学技術の開発がひたすら善であるという前提に立ちがちなが、それは妥当だろうか。これを後押ししているのは、人間の限界と戦うことを使命と考えてきた近代医学のエトスと、科学技術の開発によって経済を活性化しようとする国家や企業の前進意欲だ。だが、それは人類の幸福を志向するものなのだろうか。

こうした問いはそもそも医療の目的は何なのかという問いに私たちが連れ戻す。現代医療は達成されている知識と技術で行うことができ、科学的統計的な根拠が明示され(EBM)、関与する諸個人の利益となり(功利主義)、その人自身の意志によって(自己決定)ことあれば、それを行うという原則を受け入れる傾向にある。安楽死は分かりやすい例だが、オランダやベルギーやアメリカのオレゴン州ですでに認められている。体外受精による受精卵に遺伝子診断(着床前診断)を行い、好ましい受精卵を選ぼうという医療(デザイナー・ベイビー)もすでに行われている。こうした考え方に立てば、人間改造の医療を拒む理由は見出しにくいことになるだろう。

この短い章の中で、この問題に明快な答えを示すのは困難だ。だが、近代科学が始まるはるか前の時代から医学・医療に伴うと考えられていた、神聖な義務の意識について思い起こしておくのは意義あることだろう。医療の原点を示す言葉として、「ヒポクラテスの誓い」である(立川昭二「神の手 人の手」)。

それは、「医神アポロン、アスクレピオス、ヒュギエイア、パナケイアおよびすべての男神と女神に誓う、私の能力と判断にしたがってこの誓いを守ることとを始める。そして、以下の箇所を、治療にあたる際の根本倫理原則について述べている。「私は能力と判断のかぎり、患者に利益となるおもう養生法をとり、悪くて有害な方法をけつしてとらない。」続いて、「安楽死について」「頼まれても死に導くような薬を与えない」「そのような助言もしない」という誓いが述べられている。

これによれば、ヒポクラテスはクライエントの利益になることとクライエントが要求することに矛盾が生ずる場合があると考えており、そのことを強く意識していた。少なくとも、クライエントの「自己決定」が絶対の掟であるとは考えていなかった。守られるべき医師の規範は医療の目指すものと切り離せないものであるに違いない。少なくともそれはクライエント個人の欲望を満たすものではなかった。神々への誓いによって守られるべき人間の尊厳、侵してはならないのちの尊厳の認識を伴うものだった。

では、人間の尊厳とは何なのか。人のいのちの尊厳とは何なのか。答えは手短かな言葉で表現できるようなものではない。だが、医の未来はこの問いを置き去りにしてひたすら前へ前へ進んでいくところに関わるものではないだろう。医の未来は人類社会が知恵をふりしぼって答えるべき、価値をめぐる重い問いと切り離せないものだ。

(島崎進「未来をどう生きる」矢崎義雄編「医の未来」岩波新書 所収)

問一 この文章に、二〇字以内で適切なタイトルをつけなさい。

問二 文中の傍線部で、著者は、「ヒポクラテスの誓い」を引用し、現代の医療に関してどのようなことを言おうとしているか、二〇〇字以内で書きなさい。

問三 近未来における「医療の目指すもの」について、キーワード(科学技術、人間の欲望、医師の規範)を用いて、八〇〇字以内で述べなさい。

注意事項 1 解答用紙、草稿用紙ともに受験番号と氏名の記入を忘れないこと。

2 問題用紙、草稿用紙は解答用紙とともに机上において退出すること。持ち帰ってはいけない。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

われわれが作るいろいろなイメージというのは、簡単に申しますと、人間が自分の環境に対して適応するために作る潤滑油の一種だろうと思うのです。つまり、自分が環境から急激なショックを受けないように、あらかじめ個々の人間について、あるいはある集団、ある民族について、それぞれイメージを作り、それを頼りに思考し行動するわけでありまして。そういうイメージは、他の人間あるいは非人格的な組織のうごき方に対するわれわれの期待と予測のものになるものでありますから、ある程度持続的でないとイメージとしての意味はない。持続的であるところにイメージの役割があるわけでありまして、イメージがあまり本物から離れ、違いがはなはだしくなると、潤滑油としての役目を喪失する、つまりなんらかの機会に「案外」な行動とか、予想外の出来事に直面して、その人やそのものについて新しくイメージをつくりなおす必要が生まれてくる。こうしてわれわれはイメージを修正あるいは再修正しながら、変転する環境に適応していくわけでありまして。

ところが、われわれの日常生活の視野に入る世界の範囲が、現代のようにだんだん広くなるにつれて、われわれの環境はますます多様になり、それだけに直接手とどかない問題について判断し、直接接触しない人間や集団のうごき方、行動様式に対して、われわれが予測あるいは期待を下しながら、行動せざるをえなくなってくる。つまりそれだけわれわれがイメージに頼りながら行動せざるをえなくなってくる。しかもその際われわれを取り巻く環境がますます複雑になり、ますます多様になり、ますます世界的な拡がりをもつてくることになると、イメージと現実がどこまでくいついていくか、どこまで合っているかということ、われわれが自分で感覚的に確めることができないう。つまり、自分で原物と比較することのできないようなイメージを頼りにして、われわれが毎日毎日行動しあるいは発言せざるをえなくなる、こういう事態になっているんじゃないかと思えます。いいかえればわれわれが適応しなければならぬ環境が複雑になるに従って、われわれと現実の環境との間には介在するイメージの層が厚くなってくる。潤滑油だったものがだんだん固形化して厚い壁をつくってしまうわけでありまして。

(中略)

つまり本物自身の全体の姿というものを、われわれが感知し、確かめることができないうので、現実にはそういうイメージを頼りにして、多くの人が判断し行動していると、実際はそのイメージがどんなに幻想であり、間違っているとしても、どんなに原物と離れていようと、それにおかまいなく、そういうイメージが新たな現実を作り出していく。イリュージョンの方が現実よりも一層リアルな意味をもつという逆説的な事態が生じるのではないかと思えます。

思想史にはこういう例がしばしばある。マルクスが、「私はマルクス主義者でない」と言ったのは非常に有名な言葉でありまして、マルクスのように、非常に長大な著作を書き、自分の思想というものをきわめて体系的な形で展開した学者が、マルクス主義あるいはマルクス主義者についてのイメージが原物から離れて自立的に発展していくのをどうすることもできなかった。そこに私はマルクス主義者でないという彼の嘆息が生まれるわけでありまして。いわんや今日のように、世界のコミュニケーションというものが非常に発展してきた時代でありまして、大小無数の原物は、とうとう自分についてのイメージが、自分から離れてひとり歩きし、原物よりもずっとリアリティーを具えるようになる現象を阻止することができないわけでありまして。むしろ或る場合には、原物の方であきらめて、あるいはその方が都合がいいということからして、自分についてのイメージに逆に自分の言動を合わせていくという事態がおこる。こうして何が本物だか何が化けものかますます分らなくなります。現代にはこういう一つの非常に新しい形態の自己疎外が生じているといえるんじゃないか。ところがこういう世界的な傾向と同時に、日本では特にそういう化けもの横行を許す事情があるのじゃないか、われわれと環境との間につくるイメージの壁を厚くする条件があるのではないかという気がするのであります。

その問題を考えるために、ちよつと話をかえまして、日本の社会なり文化なりの一つの型というものを非常に図式化して表現してみたいと思えます。私はかりに社会と文化の型を二つにわけて考えることにします。一つは妙な言葉でありまして、ササラ型といい、これに対するもう一つの型をタコツボ型と呼んでおきます。ササラというのは、御承知のように、竹の先を細かくいくつも割ったものです。手のひらでいえばこういうふうな元のところは共通して、そこから指が分れて出ている、そういう型の文化をササラ型というわけでありまして。タコツボというのは文字通りそれぞれ孤立したタコツボが並列している型であります。近代日本の学問とか文化とか、あるいはいろいろな社会の組織形態というものがササラ型でなくてタコツボ型であるということが、さきほど言ったイメージの巨大な役割ということと関係してくるんじゃないかと思うわけですね。

(丸山真男著「日本の思想」岩波新書)

問一 この文章に、二〇字以内で適切なタイトルをつけなさい。

問二 現実とは違ったイメージを持った身近な例について、四〇〇字以内で述べなさい。

問三 「イメージ」と「タコツボ」という言葉を入れて、現実を考え、行動する上でどのようにすればよいか、六〇〇字以内で考えを述べなさい。